

47. グループホーム入所者の睡眠及び機能的自立度評価表, 認知症行動障害尺度の関係

医療法人社団 田村クリニック

○篠原 舞 (OTR), 寒川 貴雄 (RPT), 大矢 浩二 (OTR), 田村 美和 (MD)

【はじめに】

当院関連施設のグループホームにおいて、夜勤帯のスタッフが1名であるにもかかわらず、入所者の昼夜逆転や夜間徘徊が頻発した。そのため、グループホームスタッフの介護負担感の増大が問題化した。

それに対して理学療法士と作業療法士が、日中の活動量増加のために介入することとなり、睡眠と日中の活動性、および認知症に関する初期評価を行った。臨床への活用を目的にこれらのスケールの関連性を調査した結果、睡眠と各スケールの間に若干の知見が得られたため報告する。

【対象および方法】

グループホーム入所者のうち、評価に対して拒否の無かった7例(男性2例, 女性5例, 平均年齢 85.9 ± 3.0 歳, 改訂長谷川式簡易知能評価スケール平均 4.4 ± 4.8 点)を対象とした。なお、対象者すべての家族もしくは本人から、学会などでの報告について検査結果を用いることについての同意は得ている。

方法は、入所者の睡眠について一週間分の介護日誌から夜間睡眠時間、夜間中途開眼回数、夜間最長睡眠持続時間を調べ、一日の平均時間を割り出した。日中の活動性に関するスケールは、機能的自立度評価表(Functional Independence Measure : FIM)、認知症行動障害尺度(Dementia Behavior Disturbance Scale : DBD)¹⁾を使用し、その関連性を調べた。これらの各項目について統計処理を行い、主成分分析、及び相関関係を求めた。尚、統計学的な有意水準は5%未満とした。

【結果】

各項目の平均値は、夜間睡眠時間が 614.5 ± 103.6 分, 夜間中途開眼回数が 2.7 ± 2.3 回, 夜間最長睡眠持続時間が 355.9 ± 123.5 分, FIMが 86.2 ± 20.3 点, DBDが 52.4 ± 12.7 点であった。

各項目の関連性については、夜間睡眠時間とFIM, 夜間睡眠時間とDBDの双方に相関関係があった(図1, 2)。また、FIMとDBDにも相関関係が認められた(図3)。さらに、睡眠項目間についても夜間睡眠時間と夜間中途開眼回数、夜間中途開眼回数と夜間最長睡眠持続時間との間に相関関係が認められた(図4)。

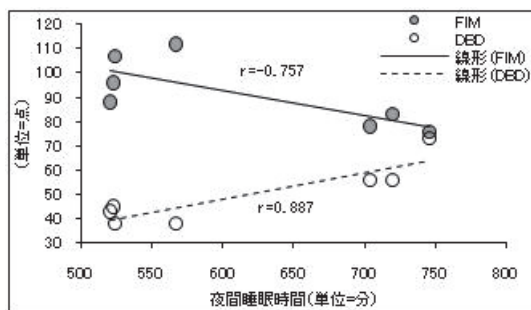


図1 夜間睡眠時間とFIM・DBD

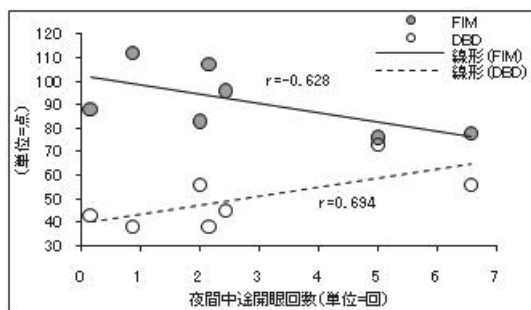


図2 夜間中途開眼回数とFIM・DBD

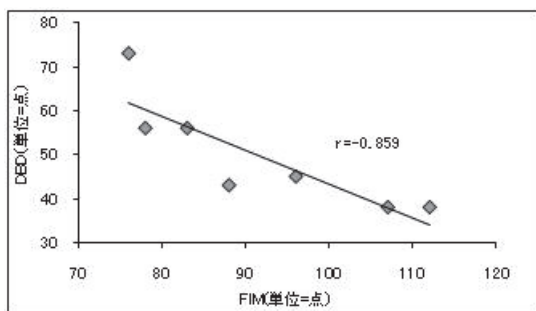


図3 FIMとDBD

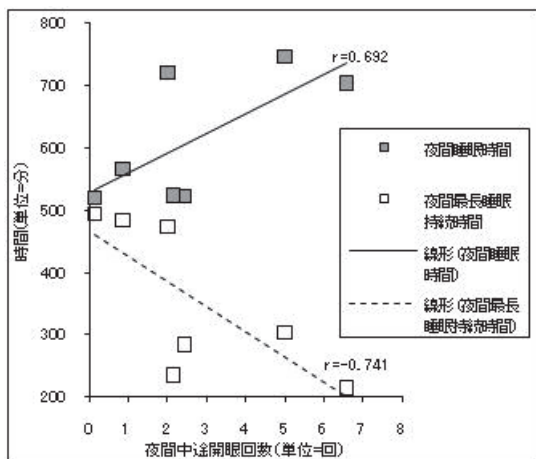


図4 夜間中途開眼回数と夜間睡眠時間・夜間最長睡眠持続時間

【考察】

本研究より、夜間睡眠時間の減少はFIMの低下やDBDの上昇に関連していた。

睡眠と日常生活について飯田²⁾は、認知症高齢者の日常生活動作能力が低下すると睡眠リズムもともに障害されると報告している。また、DBDは溝口ら¹⁾によって、介護負担度を反映するに有用な指標になると報告されている。さらに日常生活の能力と介護者の介護負担感などについて臼田ら³⁾は、日常生活動作能力の低下が介護者の精神的な負担や今後の生活に対する不安感などと関連すると報告している。

これらの報告は、本研究における睡眠とFIM、DBDに関する結果と一致するものである。すな

わち、睡眠リズムの破綻と日常生活動作能力の低下、認知症における周辺症状の出現には、密接な関係があると示唆できる。

したがって、日常生活動作能力の向上や認知症における周辺症状の軽減を図り、介護負担感を軽減するためには、睡眠リズムを安定させることが重要であると考ええる。

以上のことから睡眠リズムを整えるための今後の方策は、グループホーム入所者における日々の生活に一定のリズムを設けることだと思われる。それは、個人々人にあった馴染みのある役割や仕事を提供することによって、社会的接触の強化を図り、日々の生活リズムを整えるための環境調節を行っていくことであると考ええる。

【まとめ】

当院関連施設グループホーム入所者の7名を対象に、夜間睡眠状態と認知症などに関する評価を行い、睡眠と各スケールとの関連を調査した。夜間睡眠時間の減少はFIMの低下やDBDの上昇に関連しており、介護負担感を増大させていた。

【文献】

- 1) 溝口 環, 飯島 節, 江藤文夫, 飯塚彰映, 折茂 肇: DBD スケール (Dementia Behavior Disturbance Scale) による老年期痴呆患者の行動異常評価に関する研究。日本老年医学会雑誌 1993; 30: 835-840
- 2) 飯田 英晴: 日常生活能力からみた高齢痴呆患者の睡眠構造及び睡眠・覚醒リズムについて。埼玉医科大学雑誌 2001; 28: 131-136
- 3) 臼田 磁, 遠藤文雄, 茂木信介, 富田敦子, 中井 光, 須藤由紀子: 老人デイケア対象患者の日常生活動作能力と介護状況が主介護者の介護負担感に及ぼす影響。群馬大学医療技術短期大学部紀要 1996; 16: 47-51